大学講義科目における構成的グループ・エンカウンターの利用

水谷宗行
(京都教育大学)

Utilization of Structured Group-encounter in a University lecture class

Muneyuki MIZUTANI

2011 年 11 月 30 日受理

抄録：本研究は、大学音楽学部での教育心理学（教職科目・講義）に構成的グループ・エンカウンターと討論を取り入れ、最終授業での学生の授業評価の結果について検討したものである。授業全般と構成的グループ・エンカウンターについての評価を自由記述の内容とともに検討している。本結果から、４０名規模の教職科目（教育心理学）での利用に、一定の意義を見いだした。

キーワード：構成的グループ・エンカウンター　討論　授業評価　自由記述

Ⅰ．問　　題

構成的グループ・エンカウンターでは、ある活動（エクササイズ）という枠組みの中で（構成的 structured）、人と出会う（encounter）。その中で、以下のことを高めることだと言われている。

１．自己理解　２．他者理解　３．自己受容　４．信頼体験　５．感受性の促進　６．自己主張

これは大学の講義科目での試みであり、小・中学で行うものとは、時間・内容において異なるものになる。筆者は、大学の「総合演習」という科目の中でも構成的グループ・エンカウンターを取り上げているが、もちろん内容は異なる。ここでは「教育心理学」という中での試みで、９０分の授業の前半には構成的グループ・エンカウンター的な試みを行い、後の３０分は前後の講義内容との関連やこの授業の基本的な趣旨を踏まえたテーマについての討議を行わせている。ただし討議も問題解決を直接目指すというよりは、自己理解や人間関係を深めるといった点での配慮に重きをおいている。また将来、教員として現場に立つ時にこうした技法を行えるようにということもあり、家庭生活や社会生活にも活かせればと考えている。またこの授業の教室での人間関係や、大学生活での人間関係にも資するものとなればという思いもある。

これまで、京都教育大学における教育心理学の講義での、３回の構成的グループ・エンカウンター（以降 SGE と省略）について３回の報告を行ってきた（水谷，2003, 2005, 2007）。それは毎年１５回程度の講義予定の中に、SGE を取り入れた３回の実習的な授業を行なっているが、その各回についての報告であった。

今回、筆者が非常勤講師として行っている大学の音楽学部での教育心理学の結果を示すことになる。受講生数は４０名程度で、京都教育大学での授業に比べて１／２から１／３である。また受講生の学生生活の背景や経歴も当然異なっている。ここでの学生は教員志望も持っているが、就職環境の問題もあって、就職率は高くない。そして小学校教員の教員免許を取得するわけではないので、教職に関連する設置科目は少ない。従ってこの授業には、教育や人間の発達に関する一般教養的な色彩も含めているつもりである。また授業内容については基本的に京都教育大学と同一であるが、こちらでは音楽学部の学生であるというところから、各授業の中間に５～１０分の自由に構成したグループによる、教育現場で手軽に行える音楽演奏を取り入れている。これは事前に学生がグループのメンバーを決め、曲目や演奏法を考えることになる。そのグループ構成員は、ここで検討されている SGE の構成員とは異なっている。

机・椅子は固定式でなく移動できるが、専門教室という名称でグランドピアノが１台置かれており、４０名の講義には問題ないが、グループ活動を行うには少し手狭な印象を与える。

３回の SGE を含む授業は、最後に討論的な活動を行うが、それに先立つエクササイズがあり、それは討論を進め易くするとともに、グループ内の成員の人間関係を高めると考えられる。そして討論もまた人間関係を高めると考えられ、討論内容は議論の深まりを目指すというより、それまでの講義内容についての理解を広げ深めるとともに、グループの人間関係の向上が大きな目的であった。

Ⅱ．方　　法

対象者：大学音楽学部の教職科目「教育心理学」の受講生３６名

手続き：今回は、2011 年 7 月に授業評価的な項目に加え、SGE が「楽しかった」「役に立った」という項目での５段階評価」と自由記述で学生の反応を見ることにした。

授業期間の前期・中期・後期に以下のような授業を学生は行う。今回は一応内容を理解してもらうために示しておく。

第１回目の構成的グループ・エンカウンターと討論の内容

この授業の前回（第１回目の講義）の授業におけるグループ作りの活動

できるだけ見知らぬ人たちのグループを構成する。

全員が立って、実際に動いて、相手を選択することを経験する。指示としては、同性の２人ペアまたは３人のグループを作る。この場合、既に知っている人で構わない。次にできるだけ知らないペアを捜して４人組を作る。そしてそれらがもう一つのグループと一緒になり、合計８人から１２人のグループを作る。この活動では男女比も問題で、一般に男子が少ないので、女子を主体にまずグループを構成し、そこに男子を入れるということも年度によっては行っている。

当　日

事前に用紙を配り、いくつかの活動からなることを示し、簡単な説明をする。また各課題への自分自身の参加度の評価と各グループの構成員の平均的な参加度評価を、１から１０点で全部の課題終了後に書き込む必要があること、また全部の課題終了後に、各課題の遂行に関して、簡単な１・２文での感想文を書くことが求められる。

これらのことは、今回の課題や作業について全般的な理解を得るとともに、それらへの不安を軽減させ、ある意味で全体的な動機づけを高める効果があると考えられる。また第１課題の持つ意味は大きい。

１．ジャンケン列車　　この課題は、全体としていわゆるアイスブレイキングとしての役割を持っているが、その中に次のような機能があると考えられる。使用している講義室は一応移動可能な机と椅子が使用されている。しかし、人が通れる空間は狭く、許される活動量は少ない。特に列を作って移動するには、ある程度困難も伴う。この困難度は、活動に制限を加え個人の気分の開放性を高めるには負の面を持つが、他者の存在感や活動の一体感を増す効果があると思われる。

こうした状況を考えて、伴奏曲は通常使用される速いテンポの曲ではなくスローバラードで、肯定的で青年向きの歌詞を持つ「遠くへ行きたい」（永　六輔　作詞・中村八大　作曲）を使用している。

このような学校での構成的グループ・エンカウンターにおいて、教員の参加は、自己開示や自己呈示のモデルとしての意味をもつ（SGE の大きなテーマ）場合がある。それはまた場の緊張を和らげたり、学生の参加への意識や動機を高めると考えられる。列を作る人たちの肩に手を置き、動くことから一体感も生まれる。最後に全員で大きな円陣を作り、参加者を確認する。これも一体感を感じさせ、この後のグループに分かれた活動への参加動機を高める働きがあると思われるが、一方で、大学生という意識から抵抗感を持つ学生がいることも考えられる。

２．握手　グループ内の各メンバーと両手での握手を行う。目を合わすことによる緊張もあるが、握手を通しての心理的接近が図れる。

３．肩たたき　グループ内でペアになって行い、途中で役割を交替する。目を合わさないことで、緊張は少ない。役割を果たすことへの緊張と、役割を果たしたことによる満足及びリラックス、また受ける側での満足・リラックスがある。

４．鏡映遊び　グループ内でペアになり、一方が行う動きや表情を他方の人が真似る。リードする側は、見られること、動作のプランを立て実行・リードすることの困難や緊張を味わうことになる。おもしろい動作や表情による笑いが相互に起こるが、こうした緊張が、大きなリラックスを生む。

５．自己紹介　所属学科・回生・氏名を述べた後、大学入学後のよい思い出を、１・２文で語る。動作からことばでの活動へと移る。簡

単な表現や話題で、余計な緊張を除き、メンバーに印象を与え、名前などを覚えてもらう。早く次の人に発言権を譲り、順に何度か話す機会を与えられ、その都度氏名等を述べることになる。

6．討論　日本の子どもについて論じることがテーマである。前回の授業で世界の子どもの家庭や学校での人間関係の調査データを示しており、それを基本に２５～３０分間話し合う。
各個人の感じたことを示すこと。また羅列的にしろ意見を出しやすいことが、この場では必要と考えられている。新たな解決策を具体的に求め、示すことが目的ではない。各個人が、データを見て、考えたことを示し合うことが目的となっている。

7．握手　終わりの儀式でもあるが、最初と同じようにグループ内のメンバー全員と両手での握手を行う。最初の握手との比較でもあり、多くは感謝と心理的接近を感じる。

この後、評価用紙に回答する時間を設け、グループごとに回収する。また各活動の意図は次回の授業に説明文書を配布し、周知する。

第２回目の構成的グループ・エンカウンターと討論の内容

前回の講義内容である「青年期のアイデンティティの確立とモラトリアム」についての理解を広げ、深める討論でもある。

1．イエス・ノークイズ　教員が、個人的な事柄を受講生に問いかけ、想像により○×で用紙に答えさせる。（1．東京生まれ東京育ち　2．テニスとスキーをする　3．小学校からの歌好き）、受講生の注意を向けさせるとともに、授業者の一種の自己開示となっている（この日のテーマと係わっている）。この後答えを言う。

2．握手　グループに分かれ、グループ内の全員と握手する。前回のSGEで経験しているが、両手での握手ということもあり、緊張するとの報告が多い。

3．自己紹介ゲーム（好きなもの・こと）　所属学科・回生・氏名とともに好きなものまたはことを述べる。余計な緊張を除く。名前などを覚えてもらうために、何度か回す。

4．家庭教師と子どもの役割演技（小５・中２）　グループ内でペアを作り、子どもが前回出された宿題をしていなかったという設定での会話を行う。家庭教師役は、即時的な対応を迫られ、子ども役の相手との間で相当な緊張が生じる。そのことの克服が、次の課題で話すことへの抵抗感を減少させる。教育場面での問題の体験。

5．アイデンティティとモラトリアムについての討論　最初に「自分は～になりたい」というテーマで順番に自己開示的な語りを行い、その後前回の講義内容も踏まえてアイデンティティやモラトリアムについての議論をする（２５～３０分）。このテーマでは、現在の自分について考える機会が多くなる。

6．握手　終わりの儀式として、両手での握手を行う。 互いにねぎらう気持や感謝の表現をすることが多くなる。 最初の握手と比べ、活動や議論を経て変化を感じる学生が多い。

第３回目の構成的グループ・エンカウンターと討論の内容

1．握手　握手の意味・役割について知ることが多くなる。

2．自己紹介ゲーム（自分のレポートの紹介）　従来、自分でレポートを作成しても、他者に伝えるという機会は少ない。自己開示のよい機会でもあり、また他者の話をゆっくりと聞く機会でもある。他者に理解してもらえるように話すことの困難さを体験し、知識としていろいろな話題や領域を知る機会となる。実際に身近な人が読んだ内容や意見を、直接聞くことの意味は大きい。

３．　討論

ア．　私の理想の教師像

この授業においての大きなテーマについて、同世代で話す機会となる。

ある意味で、最も大きな自己開示のテーマでもあり、いろいろな見方を知り、自分の意見の相対化を図ることになる。自分の将来や人生設計について考えるとともに、これまで接してきた先生方の影響を知る。

イ．　構成的グループ・エンカウンターの利用の仕方

これまでの知識や体験を整理することになる。

４．握手　　最後の握手

2011 年度の最後の授業で、以下の項目で学生からの評価を行った。授業評価の項目としては不十分かも知れないが、一応授業の具体的な改善を目指した項目としている。

調査項目

１．授業のシラバスは見ましたか

２．授業の意図（ねらい）は理解できましたか

３．配布物は適量でしたか

４．教室は適切でしたか

５．授業者の説明は理解できましたか

６．授業者の声は聞き取れましたか

７．興味を持てた内容はどのようなものでしたか（自由記述）

構成的グループ・エンカウンターについて

８．楽しめましたか

９．役に立ちましたか

感想（自由記述）

全体の感想（自由記述）

Ⅲ．結果と考察

アンケート結果

表１は、各グループでの項目の平均値を示したものである。グループでは、第４グループが相対的に高い評価となっている。

表１　各グループにおける各項目の平均値（　）内は標準偏差

班（人数）	シラバス	授業意図	配布物	教室	説明	聞き取り	楽しめた	役に立った
グループ１（9）	3.9（0.74）	3.6（1.07）	4.0（0.82）	4.0（1.33）	3.7（1.15）	4.2（1.13）	4.7（0.47）	4.2（0.79）
グループ２（7）	2.9（1.35）	3.7（0.76）	3.9（0.90）	4.0（1.00）	4.1（0.90）	4.4（0.98）	4.7（0.49）	4.3（0.95）
グループ３(11)	3.1（1.76）	3.9（0.94）	4.4（0.50）	4.2（1.17）	3.8（0.60）	4.5（0.82）	4.7（0.47）	4.5（0.82）
グループ４（9）	3.2（1.39）	4.4（0.88）	4.8（0.44）	4.3（1.12）	4.6（0.73）	4.8（0.44）	5.0（0.00）	4.8（0.67）
平均	3.28	3.92	4.28	4.14	4.03	4.47	4.78	4.44
標準偏差	1.39	0.97	0.74	1.15	0.91	0.88	0.42	0.81

「シラバスを見ましたか」は、全体として低い。実際には、教員免許を取ろうとすれば、この科目は必修的な科目なので、シラバスを見るということも少ないであろう。

「授業意図の理解」や「説明の理解」は、低くなっているが、これはグループによって異なっており、第４グループでは比較的高い。

説明理解と意図理解はともに第１グループより第４グループで評価が高かった。これらは統計的な検討も行ったが、ここでは省略する。

構成的グループ・エンカウンターについては、「楽しめたか」「役に立ったか」の二つの観点で評価されている。全体に項目は高い評価を受けている。

表２　各項目間の相関係数

相関	成績	シラバス	意図	配布物	教室	説明	聞き取り	楽しめた	役立った
1.成績									
2.シラバス	−.18								
3.授業意図の理解	.07	.17							
4.配布物適量	.23	.20	.47						
5.教室の適切さ	.12	.06	−.09	.29					
6.説明の理解	.24	.13	.49	.54	.24				
7.声の聞き取り	.39	.31	.32	.50	.39	.66			
8.SGE楽しめた	.05	.26	.37	.29	.01	.39	.37		
9.SGE役立った	.16	.40	.38	.36	.12	.53	.42	.63	

表２は、各評価の相関関係を示している。成績は、「授業者の声は聞き取れましたか」と 0.39 で、全体に相関は高くはない。

これらの中で「授業意図の理解」は「配布物は適量」と.47、また「説明の理解」と.49 で比較的高い。「配布物は適量」は、「説明の理解」と.54、「声の聞き取り」と.50 であった。「説明の理解」は、「声の聞き取り」と.66、「SGE 役立った」と.53 であった。「声の聞き取り」は「SGE 役立った」と.42、また「SGE 役立った」「SGE 楽しめた」と.63 である。

これらの評価の中では、「説明の理解」や「声の聞き取り」が他の項目との関連が大きく、中心的な評価項目となっている。そしてまた「SGE 役立った」も比較的多くの項目との関連が大きかった。ここでは、聞く態度や能力または受容性といった側面が重要であることを示唆していると思われる。

次に、構成的グループ・エンカウンターについての自由記述をあげる。番号は個人を示し、後の授業についての番号とも対応している。

構成的グループ・エンカウンターについて

第１グループ

１．難しい議題でしたが、みんなで一生懸命意見をしぼり出した。いろんな人の意見を知れて良かった

２．グループで意見交換するのはとても楽しかった。

３．グループ・エンカウンターの時など、もう少し広い場所のほうがやりやすいと感じた。

４．いろいろな人の意見が聞けて良かった。

５．学年・専攻をこえて、意見を聞けたことは良かった。自分の意見に対して、反応があるのも楽しかった。

６．握手や自己紹介を何度も行うのは照れたりしたけれど、その後に討論をして、いつもより積極的に意見が言えたり親近感を持てたのがよかった。

７．初めての人と意見を言い合えたり、他の人の意見を聞け、自分とは違った観点から物事を見ることができました。

８．普段グループで授業内容について話すことはあまり無いので、いい経験になったと思います。人の意見を聞くだけでなく、それに加えて自分の意見も言えれば、もっと討論みたいになると思いました。

９．なし

第２グループ（当日２名欠席　対象者に含まれていない）

１０．いろんな人の意見が聞けて、私の意見と比較することができたのがよかったです。

１１．楽しかった。自分の意見も聞いてもらえたし他の意見も聞けて良かった。

１２．人前で話すと緊張するので、いい練習になった。

１３．色々な考え方を、ぶつけ合えた。

１４．グループの人と仲良くなれました。実際に使えると思う。

１５．実際の議論はあまりできなかった。
１６．議論は人の意見を聞くことができて、自分の考えが広がったように思えます。

第３グループ
１７．とても面白かったです。知らない先輩方とも喋れて楽しかったです。
１８．色んな人としゃべれた。
１９．あまり交流しない人との議論はその人をよく知るチャンスにもなったし、またよく知っている人でも、そんなことを考えているのかと、と深く知ることができてよかった。
２０．人前で自分の意見を言うのは難しいと思いました。
２１．時間がたつにつれてグループになじめるし、みんなの性格が分かってきて楽しめました。
２２．討論の題材が少しわかりにくかった。
２３．なし
２４．あまりしゃべったことのない人とグループになって、この人はこんな考え方をする人なんだなと思い仲良くなれたのでよかったです。
２５．小規模で話す話し方を身に付けることができたと思う。
２６．友達ふえて、一回生と話せて、フレッシュさをいただいた。色々な人の意見が聞けるのもそうだが、人まえで話すむずかしさをよく知れた。
２７．みんなそれぞれのお題を提供してくれて楽しかったし、勉強になりました。

第４グループ
２８．グループが先輩方ばかりで緊張したけれど、目の前ではっきりと自分の意見をおっしゃる先輩を見てもっといろいろな物事を考えないといけないなと思った。
２９．話し合いをすることがあまり苦痛とならない流れでした。
３０．ふだん話さない人と話すことができ、自己を表現すること、また他の人の意見を聞き考えることができました。
３１．私はどちらかいうとグループで討論するのは苦手ですが、意外と自分の考えも発言することができて良かったです。握手も楽しかったです。
３２．人の意見をより深く聞くことができました。
３３．今後初対面の人と接する時に、このグループ・エンカウンターが役に立ったらいいなと思います。
３４．非常に楽しく、また普段あまり話せないことも話すことができよかった。
３５．なかなかまじめに友だち同士で意見を聞き合うことはしないので、楽しかったし、ためになりました。最初は自分の意見を話すのに抵抗がありましたが、回数を重ねるごとに積極的にできるようになりました。
３６．変化が極めてはっきり見れて良かった。

特徴のある意見
第１グループで、「難しい議題でしたが、みんなで一生懸命意見をしぼり出した。いろんな人の意見を知れて良かった。」「握手や自己紹介を何度も行うのは照れたりしたけれど、その後に討論をして、いつもより積極的に意見が言えたり親近感を持てたのがよかった。」「普段グループで授業内容について話すことはあまり無いので、いい経験になったと思います。人の意見を聞くだけでなく、それに加えて自分の意見も言えれば、もっと討論みたいになると思いました。」
第２グループで、「実際の議論があまりできなかった。」ここでは話し手が偏らないように、順に回すことを、その間は他者が質問や意見を言わず表情などで受け入れることを重視している。
第３グループで、「討論の題材がすこしわかりにくかった。」一つの答えを求めるような議論を要求しているのではないことも影響しているのかも知れない。
第４グループで、「変化が極めてはっきり見れて良かった。」グループの変化があった。

「私はどちらかいうとグループで討論するのは苦手ですが、意外と自分の考えも発言することができて良かったです。」

これらからは、ここで行ってきた構成的グループ・エンカウンターの望まれる効果とともに限界が示されている。

ここでは討論し、一つの見解に到達するといったことを目的としてはいない。自己開示の機会としているので、自分の意見を出しやすいといったことを目的としている。また全員が意見をまず出すという状況を設定している。そしてそれに先立つウォーミングアップ的な課題を行うことによって、意見の表出に余計な緊張を強いることを避けようとし、またその一つ一つが自己開示の機会になり、お互いの自己理解や他者理解を促進することを目指している。

全体の感想

第１グループ

１．最初にしたジャンケン列車の記憶が今でも強烈に残っています。授業の合い間にグループ発表があったりして、楽しかったです。ただ聞くだけの授業でなく、グループに分かれたりして積極的に発表できる授業で良かったです。

２．理解しがたい部分もありましたが、全体的にとても楽しめました。パフォーマンスもよかったです。

３．教師にならなくても、自分の将来子育てをする時などに、役立つ知識を取り入れられてよかった。中学生に対する接し方は特に難しいと思うので、ある程度気を遣いたいと思う。

４．難しいことばっかりだったけど、教育のし方とか、子どもの思考とかためになることをたくさん勉強できて良かった。

５．パフォーマンスが毎回楽しかった。授業を聞くだけの受け身の授業ではなく、参加型だったので理解が深まった。

６．思っても見ない点をついた授業が多かったように思う。今思い返せば、小学校時代にやったアレにはこういう理由があったのかなど、考えさせられることが多かった。

７．子どもの思想とかこう言う子はこういうタイプの子だとか分析するのが楽しかった。結構共感できる部分があった。グループ発表では、自分が授業する時の参考にもなって良かったです。

８．なし

９．自分のタイプ分かりませんでした。（エゴグラム）

第２グループ（２名欠席）

１０．心理学、思っていた以上に難しかったです。（人の気持ちのことだから難しいのは当然なんですけど…）特にグループ・エンカウンターは私にとってすごくタメになり良い経験でした。

１１．子どもの発達やそれに教師がどう対応するかなど勉強になりました。

１２．子どもの心理、行動が知れておもしろかった。

１３．先生の緩急ある授業がおもしろかったと思います。内容と言うより授業のすすめ方が興味深かったです。

１４．資料がたくさんあって大変だったが、全て生徒と教師についてのことで、これだけ考え抜いた先人がいたんだなぁと思った。しっかり理解して、この授業を終わってからも活かしていきたい。

１５．なし

１６．グループでの話し合いが、意見をきいたりというのがあったのがよかったです。楽しく授業を受けれました。

第３グループ

１７．日本の子供が他国に比べ、かなり積極性に欠けていることにおどろいた、というより、他国の子供達が何事にも積極的に自発的に取り組んでいるという事におどろいた。赤ちゃんの表情や反応は、今いとこが１才になったばかりなので、とてもおもしろかった。毎回、パフォーマンスも楽しかったです。

１８．教育心理についてよく分かった。

１９．人間の行動、考え方などがきっちり裏付けされて、またどの考え方をしたければどう行動すれば良いか、等の自分を知り、自分を発展させれるきっかけになったように感じた

２０．心理学的な側面から見た人間のありかたなど勉強になった。それを教育にいかせるよう学んでいきたいです。内容がやや難しいこ

ともありましたが、授業の特徴などが見えてきそうでためになると思いました。
２１．生徒の性格や特性を知るための方法がたくさんあるんだなと思った。
２２．子供の心理など勉強できて楽しかったです。
２３．難しい言葉や話が多く大変でしたが、理解できた部分はとても為になりました。子どもの心理学を考えるのは難しいと思いました。
２４．後半にやったモラトリアムについてはまだ理解していない部分もありますが、他の授業はまだ分かりました。とても興味深くておもしろかったです。
２５．子供の時は特に何も考えずに行動していたが、心理的に考えてみて様々なことが影響していておもしろかった。子供の発展途上では周りの環境が大事であり、そのよい環境を作り上げることが私が今からすることだと思った。
２６．「近くへいきたい」また歌ってください。
２７．教師になるにあたり、子供の心理をこのような形で知ることができてよかったと思いました。

第４グループ
２８．子どもの成長に携わる立場になるには、教育の心理学は必要不可欠なんだなと思った。
２９．授業をとる前に思っていたよりもおもしろかったです。人の心理構造を考えるのが、こんなにおもしろいと思いませんでした。
３０．私は今まで心理学については全く勉強したことはありませんでしたが、教育に関連した心理学を学ぶことができてとても良かったと思います。また、積極的に発言したり、行動したりする機会を頂いたことで、より自発的に参加できました。
３１．先生の授業はとても受けやすかったです。他の教職系の授業は押しつけがましい感じがして面白くなかったので、先生のように落ちついて語りかけるように説明して下さるほうが、興味も持てるし、安心して授業を受けることができました。
３２．楽しかったです。とても興味深い授業でした。ありがとうございます。
３３．演奏発表とグループ・エンカウンターがたのしかった。モラトリアム人間についてグループで話しあった時がけっこう興味深かった。
３４．教育心理学の基礎的な部分をレポートや授業をうける中で学ぶことができ、興味深い内容だったと思いました。楽しかったです。
３５．授業では高校で学習した内容をさらに深めていく内容が多かったので、興味を持ってとりくめました。
３６．全体的に例が小学生に対してのものが多いと感じた。実際に免許を取っているのは中・高なので、実習に行っても使えるようなものがよい。

自由記述から、授業においてSGEの実施や音楽によるパフォーマンスが評価されていることが分かる。またこれらから、大学での人間関係にある程度の効果を持つことが分かった。ただこの効果については今回は検証しておらず、また自由記述の内容からグループ活動の違いを捉えることは困難であった。

構成的グループ・エンカウンターを授業に導入することに対する反応は、評価結果からも望ましいものだったと考えられる。この講義では、単に聞くのではなく、できるだけ図表を読み取ったり、課題を行なうといった活動・作業を取り入れている。音楽的なパフォーマンスを行っているのもそうした試みであり、教育現場である程度即興的にも行える活動経験から、音楽の持つ可能性や利用について考える機会になったと思える。

授業内容の評価は、実際に受講している他の授業と相対的である。ここでの「全体の感想」が、絶対的な評価ではない。またここでの受講生は、教員になる希望をある程度は持っているが、それほど切実ではなく、可能性もそれほど高くはない。そして今回の自由記述は記名を求めており、そのことによるバイアスはかかっていると思われるが、そのことによる偏りは実際にはそれほど大きくはないと考えている。それは別の年度では、無記名で行っており、ここでその比較を行ってはいないが、差のない印象を持っている。一つには構成的グループ・エンカウンター後の振り返りの評価や各授業後の感想・意見を求める場合も同じ形式の記名評価を求めているからであろう。

今回の結果からは、今後SGEの導入による効果の判定に、本格的な質問紙を作成・使用することが必要と考えられる。

Ⅳ．引用・参考文献

國分康孝　編, 1992, 構成的グループ・エンカウンター　誠信書房
國分康孝　監, 1996, エンカウンターで学級が変わる　－小学校編－　図書文化
國分康孝　監, 1996, エンカウンターで学級が変わる　－中学校編－　図書文化
國分康孝　監, 1999, エンカウンターで学級が変わる　－高等学校編－　図書文化
國分康孝・國分久子・片野智治・岡田弘・加勇田修士・吉田隆, 2000, エンカウンターとは何か　－教師が学校で生かすために－　図書文化
國分康孝・菅沼憲治, 1978, 大学生の人間関係開発のプログラムとその効果に関するパイロット・スタディ　相談学研究１２，２　74-84
畠瀬 稔・畠瀬直子　訳, 1982, エンカウンター・グループ　－人間信頼の原点を求めて－ 創元社 （Rogers,C. 1970 Carl Rogers on encounter groups.　Harper & Row）
水谷宗行, 2003, 大学講義科目への構成的グループ・エンカウンターと討論の導入について　京都教育大学教育実践研究紀要　No.3
水谷宗行, 2005, 大学講義科目への構成的グループ・エンカウンターと討論の導入について（２）　京都教育大学教育実践研究紀要　No.5
水谷宗行, 2007, 大学講義科目への構成的グループ・エンカウンターと討論の導入について (3)　京都教育大学教育実践研究紀要　No.7